



Andre Breton et la poetique du sublime : Une esthetique de l' 《idealisation sans idealisme 》

有馬，麻理亜

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2008-09-25

(Date of Publication)

2009-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4492

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004492>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	有馬 麻理亜
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学 位 記 番 号	博い第 4492 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 20 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

"André Breton et la poétique du sublime : Une esthétique de l'« idéalisation sans idéalisme » （アンドレ・ブルトンと崇高の詩学 - 「観念論なき理想化」の美学をめぐって） "

審 査 委 員

主 査	教 授	松田 浩則
	教 授	齊藤 重信
	教 授	岩本 和子

1. 本論文における主要な問題体系、先行研究の分析、構成

本論文は、「崇高点」という概念を中心に、ブルトンの思想を考察することを主要な目的としている。「崇高点」は、『狂気の変遷』（1937年）という作品に初めて登場する。多くの先行研究は「崇高点」のもつ特性から様々な解釈を与えてきた。Bonnet は、ブルトンに影響を与えたヘーゲル哲学における「point extrême」とこの「崇高点」の類似を指摘し、この点を相反するものが統合される止揚の点であると考えた。この解釈の影響は強く、「崇高点」は矛盾するものの統合点である「精神の一点」や「超現実」といった他の概念と同一視されることになる。しかし、Carrouges、Lamy といった研究者は、「崇高点」にオカルティズムの影響を認め、Jean-Luc Steinmetz は「崇高点」とフロイトにおける「昇華」の概念の共通点を指摘している。このように多くの研究者がその解釈に取り組むものの、「崇高点」はシュルレアリスムの目指すあらゆるものの隠喩に留まってしまっていた。そこで、「崇高点」という概念を再検討し、ブルトンの思想の新たな解釈を試みることを本論文の課題とした。本論文では、「崇高点」と「崇高」(« sublime »)との関連に注目した。「崇高」は古代から、詩学や哲学など様々な分野と関連し、他方で錬金術や精神分析における「昇華」(« sublimation »)もまた、この「崇高」の伝統に結びついている。崇高のこれらの意味作用が、奇妙にも「崇高点」の概念を発表する 1930 年代にブルトンの関心事に一致しているのだ。また、彼が影響を強く受けたフランスの一部のロマン派やドイツロマン派が崇高という概念の影響を強く受けている。もし崇高と「崇高点」に共通する部分があるとすれば、それは彼が意識的ではないにせよ、今まで影響を受けた文学によるものではないかと考えた。そこで本論文では「崇高点」の特徴とブルトン思想の変遷を分析したうえで、崇高の本質とブルトンの思想を参照し、彼が伝統から何を継承し、どのように自身の思想に取り込んでいくのかを見たいと思う。なお、論文の構成は、第一部で 20 年代から 30 年代までのブルトンの思想の変遷と「崇高点」に関する問題の分析、第二部では、彼の文芸批評や個別の作品を通し、「崇高点」を中心としたブルトンの思想や詩学がいかなる影響のもとに発展しているのかという問題を扱う。

2. 第一部

第一部は二章に分割される。第一章では『シュルレアリスム宣言』(1924)から『シュルレアリスム第二宣言』(1930)までのブルトンの思想の発展を考察し、「超現実」や「精神の一点」という概念を分析する。『第一宣言』は「真の生」といった表現に代表される理想の生の探求を主題とし、この理想を現実のものとしようとする理想主義を基盤としている。また、この新たな革命を実現するには、まず想像力により重きを置き、絶対的合理主義にとらわれた精神の解放が必要で

であると述べられる。ヘーゲル哲学における、精神の冒険にも共通するこの精神の革命は、『第二宣言』に引き継がれることとなる。ただし、矛盾するものの乗り越えを見ることができる「精神の一点」は、精神が目指すべき一つの様相である。つまり、「超現実」は理想的生を表す場所であり、「精神の一点」はそこに到達するために獲得すべきあらたな意識なのだ。よって、先行研究でしばしば同一視されるこの二つの概念は異なったものだと考えられる。しかし 30 年代前半、運動のこうした観念主義、理想主義的傾向が批判され、ブルトン自身も PCF との接近や挫折、さらにトロツキズムとの接近を通して、現実世界における革命の実現や理想の獲得といった問題に直面する。こうした背景のもと、新たな到達点である「崇高点」が生まれることとなる。そこで第二部では、「崇高点」の三つの特性を中心に分析を行っている。第一にブルトンの作品では、常に高所が一種の特権的な場所として描かれており、そこでは常に言語や魔術的な光の源があると述べられている。ただし「崇高点」は他の高所とことなり、実際に存在する山の頂を観念化、あるいは極度に理想化することによって生み出されている。第二に、彼の描く理想郷は、限りなく到達不可能であるか、到達に際して死に相当するような危険を伴う。また同時に時間の概念がなく、永遠の点として描かれる。このような永遠や無限の探求は、アルキエの分析するヘーゲル哲学と呼応している。ヘーゲルの「絶対知」はその全体性において永遠を含み、またそこに至るまでの様々な止揚の瞬間は、次の段階にいくための一つの乗り越えでしかないという。「崇高点」も到達不可能な「超現実」に近づくための一つの段階でしかないのではないのだろうか。第三の特徴は「崇高点」が 30 年代以降のブルトンの思想の産物であることである。『シュルレアリスムとは何か?』(1934)において、彼は 20 年代を「直観の時代」と呼び、30 年代を「理論化の時代」と位置づけ、絶対的観念論と唯物論の垣根を取り払おうと主張する。「超現実」が直観的に生み出された理想そのものであるなら、「崇高点」は現実にある物質を極度に理想化、観念化されることによって生みだされている。つまり、「崇高点」は「観念論なき理想化」というブルトンの思想の具現化なのである。

3. 第二部

第二部は三つの章に分割される。第一章では 20 年代における問題、特に「不可思議」とシュルレアリスムの先駆者たちを扱う。この「不可思議」はロマン派や暗黒小説の影響を強く受けており、メランコリーや恐怖と恍惚の入り交じった感情を基盤としている。さらにブルトンが参照するキレンの論文は、ブルトンと暗黒小説作家に共通する理想主義や感受性への回帰を明らかにする。さらに「不可思議」に関して、ブルトンは精神のメカニズムを提示する。彼は精神に「批判精神」と「精神の処女性」という二つの様態があるとのべ、「不可思議」が感受性にもたらシ

ヨックが合理主義に忠実な「批判精神」を混乱させ、「精神の処女性」を一瞬取り戻させるという。そして、この「批判精神」は合理性に反する超自然現象を論理的なものと判断し、最終的に精神の上昇の欲望を駆り立てるというのである。つまり「不可思議」という概念は彼の理想主義と密接に関わり、合理主義から脱却し、精神を理想へと文字通り上昇させる機能があると考えられているのだ。一方、シュルレアリスムの先駆者に関してはアポリネールとブルトンの書簡からブルトンがアポリネールを通じて、崇高の伝統に触れていることが分かった。また、ネルヴァルやカーライル（「超自然主義」）からは、現実と異なる別の世界への熱望や狂気の称揚を引き継ぎ、サン・ポール・ルーの「イデオレアリスム」という概念からは、やはり感受性への回帰や現実の中に理想の作品《Chef-d'œuvre》を採るといった理想主義を引き継いでいる。すなわち、『宣言』をめぐるすべての影響は、特殊な状況における感受性（狂気を含む）の称揚と理想主義に貫かれているのである。しかしブルトンの独自性は、先駆者から引き継いだこの理想主義にヘーゲル哲学の影響である精神の冒険を組み込んでいることにある。第二章では30年代以降の問題を扱う。例えば、ブルトンはこの時期オブジェの問題に熱心に取り組んでいるが、彼の思想を支えるバシュラールの「超合理主義」は、合理主義的なものに感受性を刺激するあらたな要素を流入させることで、合理的なものの境界を拡大させるというものである。そこから彼は理想の物質化という「崇高点」を生み出す思想を確固としていく。一方、以前から問題となっている暗黒小説に関しては、ブルトンはサドの思想を取り入れながら、虚構が現実の歴史の流れの裏に潜む、特殊な条件下における人間の感受性を描いていると述べる。そしてこの感受性こそ、恐怖と恍惚の入り交じった感情であるという。この感情は彼が30年代理論化する「痙攣的美」と関連するだけでなく、ブルトンが崇高における「甘美な恐怖」（パーク）を暗黒小説から引き継いでいることを証明している。また、彼はさらに暗黒小説にフロイトの生と死の本能という概念を導入し、のちに「黒いユーモア」という別の概念へと発展させていく。第三章では、詩的イマージュ理論と『狂気的愛』を扱う。『宣言』（1924）から『上昇記号』（1947）にいたるまで、彼は「上昇するアナロジー」という発想を明確にしていく。この上昇するアナロジーとは、隔たりのある二つの現実（言語によって表象された）が、批判精神の働かない状態で組み合わせられ、そこから生まれる驚きにより聞く者の精神だけでなく、記号そのものを上昇させるという仕組みである。これは第二部第一章で取り上げた、驚きという感情を基盤にした「不可思議」における精神の動きと呼応する。また、驚きと上昇という組み合わせ、さらに彼のもつ本質的な理想主義や超越的存在に対する畏怖の念は、古代における崇高の概念を再活性化させる。一方、『狂気的愛』には、主要な三つのエピソードがヘーゲル哲学でいうところの止揚のシステムを踏襲し、現実における唯一の愛との出会い、その愛との

危機、そして理想的愛の昇華を描く。これらのエピソードも、何らかの超越的啓示による驚きや恍惚といった感情が問題となっている。また、理想の愛の昇華はテイド登山を通して語られる。この頂は「崇高点」と同じ特徴を持ち、極度に理想化された現実として描かれている。また肉体的な上昇による精神の混乱、想像の世界と現実の混合、そして新たな言語表象の発見とテイド登山においてブルトンが得るものは現実における崇高の体験そのものである。そして現実の体験だからこそブルトンは再び下山し、現実へと戻っていく。しかし、「崇高点」が「超現実」にいたるまで止揚の繰り返しを必要とするように、一度現実における崇高の体験をしたものは、その存在を確信し、再び高みを目指していくのだ。